

バフチンの対話理論と編集の思想

五十嵐茂 編集者
Shigeru Igarashi Editor

要約

バフチンはテキストとテキストの境域に生まれる対話的關係を考察した。それは二つの主体の間の意味的關係を持つ応答を作る。その境域に生まれるものが“テキストの生の出来事”と呼ばれる。本論では、本を間に置いた著者の作品テキストと読者の持つ自己テキストとの応答を軸にしてその生の出来事を描く。そのためにバフチンの他者論・完結論の批判的転換をおこない、生の内部に作りうるもうひとつの“完結”を措定し、自己テキストという新しい概念を導く。読者が作品テキストと対話するとき読者の側はこの自己テキストを持って意味を交換し、著者の作品テキストと対等に応答する。バフチンの“テキストの生の出来事”はイザーが読書行為論において展開した意味生起の出来事につながる。イザーは、本はテキストに書かれていることと読者が受け取り創り出した意味の二層構造によって“読まれた本”となることを明確にした。その際、テキスト内にある空白と言われる箇所が重要な役割をはたす。編集者の仕事は、このテキストの生にかかわり、テキストとテキストの接触において生まれる意味の応答・交換や空白に現れる意味とかかわる仕事として位置づけられる。編集者がめざすべき理想の本とは豊穡な対話的応答を生み出す本となる。

キーワード

テキストの対話的關係、テキストの生の出来事、空白と意味、自己テキスト、成熟した本

Title

Bakhtin's Theory of Dialogue and Thoughts on Editing

Abstract

Bakhtin has analyzed the dialogic relationships between texts. It is a dialogue that appears as semantic responses between subjects. Things born in the boundary of texts is known as "the event of the life of the text". I have conducted a critical analysis of the theory of another person and of the conclusions by Bakhtin. I have proposed a different explanation of the conclusion, based on the internal side of my-self, and as a result, developed a concept called a "self-text". When a reader has a dialogue with an author's text, the reader exchanges meanings with the author using this self-text. Bakhtin's theory of *the life of a text* relates to the reading theory of Iser. He has described that a book becomes a *read book* because it has a two level structure, one is the meaning written in the text, and the other, is the meaning that the reader received. The work of an editor concerns exchanging the meaning in the boundary of texts. A mature book is a book that guarantees the dialogue.

Key words

dialogic relationships between two texts, the event of the life of the text, meaning and blank, self-text, mature book

出版企画書には読者対象という記入項目がある。企画会議で、この企画は一体どういう読者を対象しているのかよく見えないという意見が出される。書籍と言っても情報系や資料系、実用書からエンターテインメント、人文書、文芸書、児童書、自然科学系まで様々である。出版社はそれぞれの分野に特化しているからそこで使われる読者という言葉もさまざまなイメージを持ちさまざまな扱われるだろう。それぞれの出版社はそれを予想するノウハウを蓄積している。情報提供系や実用書系では比較的に読者はとらえやすい。「定年前後の手続き」に関する本は読者が見えないということはまずない。潜在読者数もはじき出せる。一定の読者を持つ人気作家の本もある程度つかみやすい。

しかし、読者をとらえるということはそのようなことに留まるのであろうか。「読者と言えるもの」とはいったい何なのだろうか。読者が見える、つかめるとはどういうことなのか。とくに新書読者とか人文書、文芸書系の場合、この問いはもう少しその先を深められる必要がありそうである。そこでは、一義的な意味を持つ情報提供を目的とする本と違って、読者自体が本によって揺り動かされ生成するという出来事が起こっていきそうだからである。本との接触によってはじめて生成し始める読者といってもよい。それをバフチンは“テキストの生の出来事”と呼ぶのだが、読者がエンドユーザーとしてその出来事を展開し始めるとき編集者はそこに居ないのだ。

何が見れば読者が見えてくるのか。その問いはなかなかそれ以上深められることがない。しかしそれは編集という仕事の対象と領野、性格とは何かという問いに連動する。出版編集の仕事にとってそのもやもやの本体をいちど突き詰めて考えてみるのは無駄ではなさそうである。

本と読者の接触において何が起きているか、読者はどのように本と関わるのか、その出来事とかかわって本を作るために編集者はどのような仕事をしたいのか。これらをひとつに結びつける編集論を構築できないだろうかと考えてきた。その全体を内容とする書籍編集論は空白であると言わざるをえない。

そのためには基礎となりうる必要な理論枠組みを新たに求めなければならない。本論では、バフチンの対話的テキスト理論、イーターの読書行為論などをその

ベースにする。本を間に置いて、著者と読者がどのような関係を結びうるのかを、著者の創り出す作品テキストと読者の持つ自己テキストの応答と意味交換を軸にして展開したい。編集行為は、その〈間テキスト〉の領域に身を置き、そこに生まれる著者と読者との対話的意味交換の媒介者・触媒者の役割（立ち会い、感知し、増幅し、保存し、手渡す）を果たすものという視点から見つめ直される。

なお、小論で検討される編集論にはいくつかの限定がある。まずその対象は書籍である。その中でも実用書や資格書、情報書（そこで示されるのは情報であり対話的応答は排除されるべきものとなる）を除いた一般読者を対象にした主に人文系の本ということになる。なぜならその対象がこの本で定義される編集行為をよく具体化しうるからである。また編集の仕事を対象とするなら企画の立案から著者や原稿との関係、その宣伝・普及までを対象としなければならないが、ここではあえて編集の思想としてそのような編集行為を貫いて動いているものに目を向けたい。

ミネルヴァの鼻は日暮れに飛び立つ。野戦病院のような喧噪と押し寄せる雑務から解放され退職編集者となった私に与えられるのは、長年それに愛着してきた編集行為についてメタの視点から考えられた理論的収穫を得ることであり、それがふたたび実践に環流しようようなものになるかどうかを試される。

Ⅰ 先行する編集論の意味と限界

まず先行する編集論の検討から始めよう。まとまった論として展開された書籍編集論は意外に少ない。その注目すべきいくつかは1970年代に美作太郎や外山滋比古によって試みられた。美作は『出版研究』5号（美作、1974）に「編集論序説」を発表し、後にその一部を『編集と著作権』（美作、1988）に収録して刊行した。また外山は『エディターシップ』（外山、1975）を刊行した。この他にも、岩崎勝海の編集論などが現れた。その後、松岡正剛の編集論や編集体験についての数多くの物語りは見られたが、書籍編集の全体理論を構築する試みは美作・外山の後、発展させら

れたとは言えない。まず外山と美作の編集論は、編集について何を明らかにしようとしたものかを検討してみよう。

1 外山滋比古の編集論

外山は『エディターシップ』の中で編集という行為を人間の精神活動中にも見られる行為に類比しながら捉えようとした。

彼の編集論はアンソロジー論に特化されている。アンソロジーを編集するとはまず選ぶ行為である。それは棄てるべきものと価値あるものを選び分ける価値判断の行為である。同時に引用の行為であり、あるものをそれが置かれているコンテキストから引き離し別のコンテキストに移すことである。元のコンテキストに置かれていたときの意味は新たなコンテキストのなかでかならず意味の変容を伴う。選択や引用というアンソロジーの活動は、記憶や人間の認識活動においても、あるものを残しあるものを棄てる「ゆすり落とし」として行われている。このような活動のなかで発揮されるのがエディターシップであり、その意味で「われわれはひとり残らず、無任所〔職業としてのそれだけでなく一人ひとりの精神活動としての〕エディターでなければならない」(外山, 1975, p.55)。

アンソロジーの底ではたらいっているもうひとつのエディターシップは統合の作用である。とくに「相互にあまり縁のないものをある配列でまとめると、とくべつなおもしろさが生まれる」「雑多なものを一定の枠の中へ集約することによって、『まとめ』の美学が生まれる」(同, pp.68-69)。配列の妙である。彼はこの「まとめの美学」に着目した。

新たな結合作用を起こすためには、タイトに結合しているものを切り離すことが必要である。「そうすると、新しい結合作用が動き出して全体化がおこなわれる可能性が生まれる」(同, p.74)。

また、結合は眼に見えるところだけにはたらくわけではない。結合のないように見えるところには実は強力な結合作用がはたらいっている。俳句や短歌などの短詞型文学の切れ字は「空白の空間がただ結合要素として働くばかりでなく、情緒性を帯びることを切れ字の創始者たちは発見していたものと想像される」(同,

p.103)。空白箇所には実は語られない結合の指示が豊かに行われている。「表現はポジティブに描き出すことにだけ価値があるのではなく、表出を抑制したり、ときには表現されたものをあえて抹殺するネガティブなところにおいても重要な働きを見せる。…ポジティブな表現をかりに第一次的表現であるとするならば、…ネガティブな表現は第二次的表現であると言うことができる」(同, p.110)。この指摘は後述するイーザーの「否定性」の論に通じる。

このような統合作用がエディターシップとして「人間の知的活動のきわめて大きな部分」を成している。アンソロジーのところで指摘した選択のはたらきが「第一次的エディターシップ」であるとするなら「それに対して、選び出されたものをどのように結びつけるか、の問題は第二次的エディターシップである」(同, p.88)。

そこから彼は無から有をつくる第一次的創造と第二次的創造を区別して、編集の真髄すなわち「エディターシップは…基本的創造ではなく、二次的創造、つまり、すでに創造物であるものに、さらに創造的機能を加えるメタ創造である」(同, p.139)と結論づける。

外山が、引用による意味の変容、まとめの美学が作り出す意味の創出、空白がひきおこす意味、統合という意味の結合作用などをエディターシップやアンソロジーのはたらきとして語ったことがらとは、言語・テキスト上における意味の働きやふるまいの姿の取り出しであった。

編集行為をそのような意味構成を行なう人間の精神活動に照らして基礎付けようとした点に外山のエディターシップ論の最大の特性がある。その力を知悉し見据え編集行為として仕掛ける、それを編集論として明らかにしようとした。それを繰り込めない編集論は豊かな展開を持ってないことを外山編集論は示唆している。

2 美作太郎の編集論

美作は、著作の冒頭で、「編集とは何か」という定義すら見いだせない状況について語り、編集という仕事の固有性を理論的に確立しようとして編集の定義を試みた。

著作権法中では、「編集」によっていわゆる編集著

作権が生まれると唯一認められるのは、「編集物」の場合である。編集物とは、アンソロジー・作品集、事典や年鑑などを編むときのように複数の著者が創作した複数著作物を取り扱い、「その素材の選択又は配列によって創作性を有するものは、著作物として保護する」（同法、第12条）とされる。この法律上の規定は、編集とはアンソロジー＝「二次的創造性」であるという外山の定義に合致する。

しかし美作は、編集の創造性について、著作権法の規定と外山の指摘についての留保を行なう。ひとつは、複数著作物であるアンソロジー＝編集物にたいしてだけ編集がはたらくという点である。美作はここで選択と配列という編集の機能は、時に単独の著者によって書き下ろされた著作物にも生じることがある、と言う。たしかに単独著者の場合でも、既稿をどさっと渡され、あるいは書き下ろしでも書きためたものを渡され、編集者が主導してそれを一冊の本の構成にまとめ上げることが任せられるとき、本としての一冊の結合状態・まとまりを能動的につくり出している者は、実質的には編集者である。

もうひとつの留保は、二次的創造は選択や配列という編集機能だけでなく整序という編集行為からも生まれるという点である。編集者は「一定の形態をもつ出版物にするために『整序』する」が、「この『整序』は、書かれた文字…を活字にするという簡単な操作ではなく、タイポグラフィの可能性をふまえた知的・精神的な作業であって、この作業によって^{なま}生まの著作物はリーダブルな複製物になるだけでなく、編集者の価値観のスクリーンを通して新しい生面を獲得することになる」（美作、1974、p.54）。

生原稿が本という形態を獲得する上で編集者による整序は欠かせない。原稿をそのような形態ある商品に仕上げるこそ編集者が職業的なプロの技を発揮しておこなう編集行為である。この「二次的創造—ここで言う創作性—は…原稿（著作物の原本）から出版物への『変容』の過程の中に見出される」（美作、1988、p.104）。この変容を成しとげることのなかにも編集の創作性が生まれる。

書籍編集全体における創造性について美作はさらに展開する。彼は編集の過程を二つの段階にわけ、それぞれについて編集の創造性を指摘する（美作、1974、

pp.69-73）。第一段階は企画を立て原稿を入手するまでの過程である。編集者は企画を提案し、著者の執筆に立ち会い、内容について助言を求められ、それが採用されたり、場合によっては構想を軌道修正したりすることに影響を与える。これは、「著作者の創造行為への『内面的・実質的参加』」（同、p.71）である。もちろん編集者が代わって書くわけではなくその反応は著者の創造行為に吸収されるが、「ここには確かに一種の創造機能がはたらいっている」（同、p.71）と美作は指摘する。そして原稿入手後の第二段階が来る。ここでもゲラの「修正増減」についての編集者の著者への要求・提案は内容にかかわって創作性を持つことがある。

それでは編集とはなにか、編集の創造性とは何かについての美作の接近の仕方について検討したい。

まず外山のエディターシップ論に対する美作の態度を検討しよう。美作は、外山の「拡散した」「広義の」エディターシップ論は編集の固有の定義をあいまいにするものとして退けた。しかし外山がその編集論のベースに置いたものは、テキスト上での意味の働き・ふるまいへの眼差しであった。後述するバフチンやイザーが明らかにするように、編集者がそのような意味の活動について知悉すること、さらにテキストと意味のかかわりについて見つめる眼を備えていることは編集という仕事を豊かにするうえで欠かせない内容をなす。意味の働きに眼を据えようとしない編集論は自身を貧しくする。美作の処理は、編集論に重大な空白を生むこととなる。

美作の編集論のもうひとつの特徴は、編集者の創造性という問題を明らかにしようとしたことである。「著作者の創造行為への『内面的・実質的参加』を行なう編集者の役割に注目する指摘にそれは現れている。

注目すべき点は、彼が外山の「まとめの美学」という指摘をひきついで編集行為を「まとめの哲学」として取り出したことにある。本には採用されなかった部分にある「〈まとめの哲学〉ともいべきものが編集者を突き動かしているのではないか」（同、p.68）という指摘は編集行為の本質的な衝動を言い当てているものであり敷衍される必要がある。なぜなら成熟した本にとってまとまりある作品であることは必須である

からである。その未成熟を感じたとき編集者は、まともある世界を立ち上げるために著者の創造の領域に越境、介入する者として現れることがありうる。本としての成熟を感じ評価しうる力量は編集者固有の役割と能力である。

美作は「著作者の創造行為への『内面的・実質的参加』」の行為として編集者が行う助言の創造性を語る。しかし第一に、それが著者と同質の創造性への参加や補助として語られるなら編集者固有の創造性を明らかにすることからはズレて行ってしまいうだろう。著者は同じ創作仲間として編集者の力を借りたいわけではない。また編集者の創造性は著者との関連においてのみ認められるものではない。それは後述するように“テキストの生の出来事”というスパンから検討されなければならない。

著者が求めている助言ということについても吟味が必要である。編集者への問いかけは、私が書いたものは読者に認められ受け容れられるだろうか、読者にどう受け止められるだろうか、どのように反応するだろうか、ということを目の前にいる読者あるいは読者というものを知悉しているプロである編集者の評価として確かめたいのである。編集者は、著者の創作行為の近くに居てそれと立ち会うなかで、創造過程にそのような読者の眼と心を内包させる位置に居る。その内包が成功するなら、本はあらかじめ読者との応答を組み込んだ対話性の豊かな本となる。しかし著者と編集者のあいだに行われる対話が生む創造性について美作編集論においては立ち入って考察されない。

外山の編集論に戻れば、彼はテキストにおいて意味がどのように発生するかをとらえる視野を導入した。この視野は編集の仕事を豊かにし、意味にはたらきかけうる編集行為という発見をもたらした。しかし、そのテキストに含まれる意味はさらに、本を間にして著者と読者、著者と編集者、編集者と読者のあいだで交換されていく。それが本という“テキストの生の出来事”を形づくる。そこに必要となるのは、(間テキスト)の視点、すなわちテキスト間の意味交換を見据える技としてのエディターシップである。それは外山においては検討されなかった課題として残された。

二つの編集論において検討されなかったそのことを明らかにしうるのがバフチンの対話的テキスト論であ

る。

II バフチンの対話的テキスト論と自己テキストの成立

1 テキストの対話的關係とテキストの生の出来事

われわれは外山と美作の編集論からさらに前に進み、新たな見晴台にのぼらなければならない。それは本を間に置いて著者と読者とのあいだで行われる対話的意味交換である。それを編集論の主題として取り出さなければならない。

ロシアの文芸学者、ミハイル・M・バフチンは対話的テキスト理論としてそのことを深く考えた。彼は次のように指摘する。「人間の存在そのものは(外面的・内面的を問わず)最も深い接触である。存在するとは接触することである」(バフチン, 1988, p.250/1979)。すなわち「人間の生そのものの対話的本質。…生きるとは即ち対話に参加すること—尋ね、耳を傾け、答え、同意したりすることである。この対話に人間は全身と生命活動のすべて…によって参加している。人は、自己のすべてを言葉の中にこめ、この言葉は対話的に織りなされた人間の生の中へ、世界の饗宴の中に入ってゆく」(ibid., p.262)。

また彼は「人間の行為は潜在的なテキスト」(ibid., p.201)であるとも述べている。広い意味で使われたこの「テキスト」が意味するのは、人間の行為が「応答として、意味的立場として」対話的文脈において理解されるとき、人間の存在とその行為がテキストの示す対話的な性格と等価であることの指摘である。これは、人間の生のレベル、存在のレベルに対話性が存在することの確認である。表現を逆転すれば、狭義のテキストが対話的性格を示すのは人間の生そのものの対話的本質に根ざし、それを表現するからであると言えるであろう。

バフチンのテキスト論が分析したのは、「テキスト間、およびテキスト内部の対話的關係」(ibid., p.196)の独特な性格についてであった。テキスト間の対話的關係とは、「二つのテキスト—すでにあるテキストと

つくり出され応答するテキストの出会い」(ibid., p.200)として現れる。たとえば、目の前に置かれたテキストに対して、問いただしたり、反駁したり、あるいは信任したり、引用したりするという関係を取るとき、そこで作られるのは、ひとつのテキストに対する新しい枠組みとなるコンテキストによって作られるもうひとつのテキストである。そしてそれはかならず対話をなす。

このように「二つの言語作品」(それは日常生活の言葉のやりとり、小説作品、論文までふくむのだが)「すなわち発話がたがいに対置されるとき、両者は特別な意味の関係におかれる。それをわれわれは対話的关系と呼ぶ」(ibid., pp.222-223)。

そのテキストが示す対話的性格を分析するにあたって、バフチンの独創と言えるのは、テキストとテキストが接触して生まれる〈間(かん)〉の領域に目を据え、その境域に生成するものをテキスト論の主題的対象として取り上げたことである。

それはまず、「テキストの生の出来事」とバフチンが呼ぶものであり、「テキストの真の本質をなすもの」であるとされる。それは、「つねに二つの意識、二つの主体のはざま〔二つの主体、二人の作者の出会い〕とも」で生じる」(ibid., pp.199-200)。

そのような主体がおこなうテキストとのかかわりは、そのテキストがまずは選ばれること、それが再読されること、引用されること、注釈を付け加えられること、などとして行われる。そのようなかかわりは、別の主体によってテキストが再演されることを意味する。その再演が「テキストの生の新たな一回かぎりの出来事」(ibid., p.199)を生みだす。「理解とは、他のテキストたちとの相関と新しいコンテキスト(自分の、現代の、未来の)における意味づけの仕直しである。…出発点は与えられたテキスト、後ろへ進めば過去のコンテキスト、前へ進めば未来のコンテキストの予見」(ibid., p.328)。これが過去へも未来へもつながる「テキストの生の出来事」の連鎖である。

さてバフチンによれば、テキストには「反復され再現しうるもの」という普遍運用的な側面とともに、発話としてのテキストに現れる「一回かぎりのもの、個別的なもの」としての意味の開示・交換の側面がある。「テキストの生の新たな一回かぎりの出来事」として

のテキスト間の対話を与えるものは後者である。テキストにおける相互性、テキストの対話的關係を支えるのはそのような意味の開示と交換として行なわれる。

ここにテキストの対話的応答の特質が現れる。それは意味的關係として作られるということである。バフチンが、意味と名付けるものは問いに対する答えである。「意味の応答の性格。意味とはつねにある問いに対する答えである。何ものにたいしても答〔え〕ないものは、われわれにとって意味のないもの、対話からはずされているものである」。さらに、「意味は潜在的には無限であるが、それが現実化されるのは、もうひとつ(他の)意味と触れ、せめて理解者の内部のことばとしてでも問〔い〕と触れあって、初めて可能なのである」「現実の意味は…二つの出会い触〔れ〕あった意味たちに属している」(ibid., pp.303-304)とも言う。これは、ひとりの者が持つ「潜在的に無限な」意味がもうひとつの意味との接触によって応答としての意味を開くことを表している。

その接触の境域に投げ出された言葉は、誰のテキストであろうと作者の外に置かれ、作者の手だけに属するものではなくなる。それを受け取るもの、聞くものにも「質問し、挑発し、同意し、反駁する」対話者としての権利が生じる。それがテキストの対話的關係を作る。バフチンが明らかにしたことは、そのようなある意味とある意味の接触によってしか作られないものがテキストの〈間〉の領域に開かれ存在しだすということであった。

さて意味の応答が行われるのは二つの主体、二人の作者の間においてである。そこで意味を開きうる主体とはどのような者か、という問いが生じる。バフチンは「他者の声を…抑圧したり…終わらせることは決して」せず、「徹底的に自己を開示させ、自己自身を裁かせ、自己自身を論駁させ」(ibid., p.247)る關係としてポリフォニックな対話的關係を描くが、それを担う自由に自己を開示しうる主体がまずは想定される。この主体に関する問いはバフチンによってはこれ以上語られることはない。この問いについては、バフチンの他者論を検討した後にふたたび立ち戻ることしよう。

2 バフチンの他者論と完結の作用

バフチンの他者論はアメリカのバフチン研究者、ホルクウィストが「位置設定の法則」(Holquist, 1994, p.32/1990)と呼ぶ認識論の上に構築されている。私が他者を見る眼と私が自分自身を見る眼は知覚において性質の違う二つのカテゴリー—自己のものである時間／空間(自己カテゴリー)と他者のものである時間／空間(他者カテゴリー)という二つの知覚・視界である。

自己カテゴリーにおいては自分自身の生はどうとらえられるかをバフチンは次のように描く。生の内部において、私はさまざまな活動をおこなっている。その行為は目的を持ち達成をめざし結果を得る。その行為の時間は生きている限り閉じられることはない。時間は開かれていてつねに未—完結のものとして体験される。生きることが持続するためには完結していないこと、完結や固定化をたえず破碎して前に進むことが必要である。たえずもっと開かれた未来の意味と成果をめざして行為は続けられ、現在の到達において終着ということにはならない。このような私の生のありかたが、私が私の全体を自らは知覚することができないという限界をあらわす。「私たちは自分自身の内に、自身の人間のその全体を知覚することも、その能力もないのである」(バフチン, 1984, p.9/1979)。

この限界の外に出て行くためには他者カテゴリーの特質である外在性が必要となる。対象の全体を示すには、この外在的位置からの他者の目による対象の“完結化”作用が必要となる。他者の眼は私の内部的生の世界の外に出て私を外在の位置から見ることを可能にする。バフチンはこの眼の作用が行なうことを“完結”という言葉で表現する。それを可能にするのが“他者の眼の優位性”である。

バフチンは、〈自己と他者の関係〉を、小説世界における〈主人公(登場人物)と作者〉との関係になぞらえて言及する。主人公は自分自身の完結した形象を自ら見ることはできない。それをよくなし得るのは、他者を外在の位置に立って見る“作者の目”である。作者は主人公の全体を完結した姿において示す。開かれた生の出来事のうちに散在している主人公のすべて

をまとめること、そのまとまりにおいて主人公の姿を示すことは作者の能動的な創作行為である。「自分自身の内側からは分散している主人公、認識の課せられた世界と、倫理的行為の開かれたでき事のうちに散在している主人公のすべてを纏めること、主人公とその生を纏めること」(ibid., p.21)である。

バフチンはこの力を作者の仕事として取り出して見せた。作者によるこの完結という行為の性格について、「作家とは生を離れて能動的になれる人間であり、彼は…生がそれ自身のためには存在しないところ、生が自分の外部に向き合い、外在の、意味を離れた能動性を必要とする外側からである」(ibid., p.289)と言う。それは、「観照の行為」として行われ、その観照が「純粋な美的行為」(ibid., p.39)となるのである。

対照的に主人公自身がなし得るのは、前に向かって生きること、生きることに完結していないこと、生が開かれていること、現にある自己の前方にある課題と向き合いながら生の流出を続けることであり、現にある自己と一致することなく、私の現在に固定化されることを決して肯んじず、これが私の最後の姿であるという自己に関する完結の言葉を永遠に先送りしながら、内側からは完結しえない生の出来事の中に直接いることであつた。これが、私が完結を成しえない理由である。この過程には終わりというものが見えない、とバフチンは言う。「最も本質的な点で私はいまだ存在していないという意識だけが、私の生を自分(自身への関係としての自分)から組織する基盤となる。所与の自分自身と原理的に一致しないというこの正当な狂気が、私の内なる生の形を条件づける。私は自己の現存を受け入れることができない」(ibid., p.189)。そして「私は心の奥底では、新生という内的な奇跡が不断に可能なことをつねに信じ、希望しながら生きている」(ibid., p.190)。たえずつきまとう、この自己への不満足の間が生の持続へと駆り立てる。

バフチンは、日常の中の生の流れと作者が行なう完結を対照し、生の流れの内側において私が行ないえないことが作者の力によって行なえることをこのように強調する。

3 生の内部に作りうるもう一つの“完結”

バフチンの言う“完結”の性格をさらに確かめておこう。バフチンの言う完結は、登場人物（主人公）を形象することを目的としている。そこにおいては主人公は生の流れのなかから切断され、生の個別の目的や意味とはもはや無関心の平面に連れてこられ、生の歩みを停止している。なぜなら作者による完結は、観照と美的形象という他者の意味のためにつくられ閉じられるのだから。そこで作られた形象は私の生の現実にふたたび立ち戻り流動することはない。「美的に体験された他者の境界は、彼を真に完結させる。彼の全体を、彼の能動性のすべてを締め上げ、それを閉ざす」(ibid., p.135)。

ここに至り、バフチンの完結という概念はさらに立ち入って検討されなければならない。この言葉によってバフチンは、①「開かれたでき事のうちに散在している主人公のすべてを纏めること、主人公とその生を纏めること」によって主人公の全一的形象が形成されることを表すとともに、②それは生の展開を閉じ、生の流動を静止し、意味を限定し固定することによって成しうるとされた。

まず①について検討する。あるものを〈まとまりあるもの〉として示すとはどのようなことか。経験の成熟と言葉による表現について考えぬいた思想家・森有正の次のような言葉が手懸かりになる。森によれば、経験が成熟するとは外部の対象が自分自身の内に入り込み存在しだし心の秩序にまでなることを言う。それを言葉はどのようにとらえるか。

彼は、「私は定義ということばを、デフィニール (definir), つまり限定するという語源に戻して使っている」と断った上で、「デフィニションというのは、輪郭を明らかにして、それだけで一つのまとまったものとして示すという意味」であり、それがあるものの定義であると言う (森, 1970, p.81)。あるものが定義されるには、それが輪郭あるものとしてまとまりあるものの姿として示されなければならない。私が他者に対して輪郭ある者として現れること、あるいは私に対して輪郭ある者として現れる他者、それは定義を備えたものの徴しである。輪郭とは意味を湛えた表

象として現れる。対話的応答はそのような輪郭を備えた者のあいだで互いの意味を担った輪郭を交換する関係において成立しうると言うことができるだろう。そのようなまとまりあるものの示す輪郭 (定義) を完結という言葉で言い換えてもそう的外れではないだろう。

森はそのような〈まとまりあるもの〉が経験の成熟の中で自己の内部に現れる過程を思索した。とするなら、そのような輪郭への促しや志向は自己の生の内側に属するものであるということを示している。

バフチンもその存在を示唆するような次の文言を『作者と主人公』のなかに置いている。他者による完結の要素は、内部的生の中においてはすぐに流動する生の持続的流れの中で溶解してしまい“完結しない”と述べた後で、「時に見られるように、こうした反映が生の中で凝固するとき、それは、遂行の停滞、プレーキとなり、場合によっては、私たちの生の夜からの分身が生じるまでに濃厚になる」(バフチン, 1984, p.24/1979)。これは、生を「凝固」するような完結が時に、生のただ中に現れる場合を述べている。凝固や停滞という言葉でネガティブに表現されているが、この叙述が認めているのは生の内側に意味のまとまりが生まれうることであろう。

生の流動的本質から見ると、どんな固定化も生にとっての自己否定であり生の内側にはそれを作りえないというのがバフチンの立場であった。しかし彼は生の流動性とそれを固定する完結との対立を過度に強調しすぎたのではないだろうか。また、日常的生が生きる世界を作者が完結する美的価値の世界と対照してあまりに局所的に限界付けていたのではないか。

この私は生の内側において〈生の全体的意味〉を課題として抱えつづきみずから問うことができるかという問題がここにある。そしてそのように問う自分をメタの眼でとらえる自己は現れうるか、という問題を伴う。これはそう言い切る根拠が論証されるかどうかという以前に、生命はたえず自己生命の根拠をみずから強化することを本能として志向しているように思える。

脳の最新研究によれば脳の意識活動の最大特質はまとめあげる志向にあるらしい。脳科学者の茂木健一郎はそれをクオリアとして探究しているし (茂木, 2001), 同じくジェラルド・M・エーデルマンは脳が構成する意識状態の全般的特徴として「ひとまとまり

に統合されていること」(Edelman, 2006, p.144/2004)を挙げている。

私が生きているということは、仮の定立であろうとも「私はまとまりある者である」と言い切ることによって前に進むことができるという質の問題のように思える。

そのような〈生の全体的意味〉を問う私という者を設定するなら、そのように問う者は、自分がいま〈まとまりある者〉であるかを感覚するだろう。まとまりある輪郭を持っているかどうか、それは内部感覚からたえず湧き起りそれを裏切ることはできない。その〈まとまりある輪郭者〉こそ〈生の全体的意味〉を問う私を担保する者である。

それをバフチンの作者による完結に対して、〈生の宿り木〉のように私の生の内部につくられる“完結”として措定することができる。生の内部に支点を持つ〈生の宿り木〉として現れる完結は、他者に能動性を締め上げられるような外からの完結ではない。そこで得られ構成された生の意味は生の隣りにあってただちに私の実践に投入されるものであり、生の全体に浸透し自己の能動性を励ます。それは生の内側において自己の生を方向づけ、その生をまとまりある生として維持するために、生の全体に意味を浸透しようとする。

他者による完結との最大の違いは、それが生の内部に環流され、生の流動に意味を浸透し、それゆえ溶解され、日々新たに立ち上げられるそのつどの“完結”であることである。それは“固定”と流動、“完結”と解体、立ち上げと崩されのめまぐるしい過程の中に存在する。それが〈生としてのまとまりある姿〉を自己開示し自己展開する生を表す。

二つの主体、二人の作者の間において行われる意味の応答において意味を開きうる主体とはどのような者かという問いにたいするとりあえずの答えがそれである。すなわち、生の全体的意味を内部から問い続ける者であり、その意味を担いうる、まとまりある生として示しうる輪郭を持つ者であり、それを自己定義として表現する者である。

4 バフチン自身による他者論＝作者論の転換

バフチン自身がそのような完結を設定しうる言及を

行なっていることにふれておく。

それは『ドストエフスキーの詩学』のなかで作者と主人公の関係について行われている。ドストエフスキーの作品中の主人公は、作者と並び立ち、世界観や思想において自由に声を上げ、作者と対等に論議し、反駁し、作者に同化されない独立の人格を示す。それがポリフォニーの文学と言われる新しい小説をつくりあげた。「それぞれに独立して互いに融けあうことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキー小説の本質的な特徴なのである」(バフチン, 1995, p.15/1963)。

そのような主人公は世界と自分自身に対する視線を自ら持ち、その自己意識からすべてに対して意見を表明する人間である。「ドストエフスキーは作者および語り手という存在を、彼らの視点の総体、および彼らが主人公に与える描写、性格づけ、定義といったものすべてとともに、主人公自身の視野の中に導入し、そのことによって主人公の完結した現実をまるごと、彼の自意識の素材としてしまった」(ibid., p.102)とバフチンは言う。そのような移譲の結果、作者自身の眼に見えることをすっかり自分の眼に取り込み、自分自身に関することも作者(他者)の眼で見る主人公が誕生する。主人公はここでは、「直接の意味作用をもった自らの言葉の主体」(ibid., p.15)として位置づけられる。

このバフチンの指摘は、バフチン自身による他者論＝作者論の転換、もう一つの他者論＝作者論の存在を示唆している。これを主人公の作者化と言おうが二人の作者同士の対話的關係と表現しようが、このように内容において作者と対等な主人公が存在しない限り、ポリフォニックな対話が成立しないことを示している。

この新しい意味を持つ主人公は、他者の眼を移譲されたことにより、他者の眼の機能を自らが果たすことができる“作家的主人公”である。作者の力を持った主人公と言ってもよい。「作者による確固とした総括的定義であったはずのものを、主人公の自己定義の一要素と化すことによっていわば小さな規模のコペルニクスの転回」(ibid., p.102)を他者概念に行なう可能性を持つことになる。一旦閉ざされた自己の能動性への出口がここに切り開かれている。

5 自己定義ファイルと輪郭

さて、生の全体的意味を問うるメタ自己を対話的応答における当事者として設定した。もう少しその中身に立ち入ってみよう。私が「自分はどのような者か、どのように行動する者か」という“自己の一定性”についての問いを自分自身にたいして発するとき、それがとらえようとするのは自己の輪郭（バフチンが主人公の形象と言ったもの）である。

それはまず私が他者（と世界）にどう出会うかということを中心とする。自分は他者にどうかかわる人間であるか、どう応答する人間であるか、他者をどう承知し了承する人間であるのか、どのような他者をどのように受け容れる人間であるのか、なぜ無縁な他者が私にとってかけがえのない他者になるのかという問いが発せられる。この問いかけは自分自身との対話的メタ応答である。

それははからずも自己に固有な生の意味とテーマを明らかにし、自己の輪郭を了承することとなる。その過程を自己編集作業と名付けるならその蓄積が自己定義ファイルを作る。

自己定義ファイルがふくむことになる内容は、他者の目（作者）がおこなう完結によってとらえるものとパラレルなものである。その共通テーマは、①自分の生の出来事をとらえる一望の視野を得ることであり、②生に埋められてあるときはそれぞれのピースに断片化され散逸している私とその生の出来事をまとまりある全一体としての生にまとめ上げることであり、③他者と接触する境界で表れる自己の輪郭—容貌、性格、心、志向、行動流儀、生のテーマをつかむことであり、④個々の行為が対象となるだけではなく、そのような行為をする自分とは何者であるか、どのように行動する者か、という問いを発し、そのような一定性を持った（主人公となった）自己をとらえることである。

この自己定義ファイルは、まずなによりもまとまりある者としての自己の輪郭を示すものであり、その輪郭が生全体の意味を担っていることを主張するものとなっている。

しかし自己定義ファイルはその範囲に留まらずそれに了承され取り入れられた他者と世界の輪郭を表す他

者定義ファイルでもある。

そのような自己定義ファイルを通じて、なにがしか観と言えるもの—人間観、人生観、世界観（体系を持たない通俗道徳や処世訓を含む）を形成し、価値と呼ばれるものへと接近する。

また自己定義ファイルは、他者世界がそこを通過してやってくる入場通路であり、世界をどのように受容するかという固有な読み込みの様式を示すシステムファイルでもある。

このようにして自己（と他者）を定義するファイルが自己テキストファイルの内容となる。

ここで最初の対話的テキスト論に戻れば、対話とは「つねに二つの意識、二つの主体のはざままで生じる」（バフチン、1988、p.199/1979）ものであった。そしてそれは意味のつながりを持つ応答であった。私はここでその有りようを一層立ち入って表現することができる。二つの主体の対話とは、生の意味を表す輪郭（自己テキスト）を持つ者同士のあいだの対話であり、輪郭（自己テキスト）を互いに交換することであることを。対話的応答とは他者の輪郭が世界から私の内にやってくることであることを。逆に言えば、輪郭を損傷した断片的な生にあっては意味はみずからを開示することは叶わず、対話的応答が阻害されることを。

6 自己テキストと自己形象化

自己定義ファイルはまずは生のレベル、存在のレベル、行為としてのレベルでの自己編集によって生まれるものであるが、言葉に取り出された形象としての自己テキストにその内容は引き継がれる。

「人間という特殊な存在は、つねに自己を表現する（語る）、つまりテキストを創造する」（*ibid.*, p.201）、「精神は…テキストのかたちで実現されたものとしてののみ、自分にも他人にも与えられる」（*ibid.*, p.198）からである。それが自己テキストとなる。

自己テキストは自己を形象しようとする。それは、生のレベルに存在する全体的意味を象（かたち）にしようとするうながしである。バフチンによってそれは作者に与えられた。しかし、その作者の力はこの私にも与えられている。

このテキスト形成の事情には二つの側面がある。一

つは、こういうことや人に出会ったことがあるという元になる経験が所有されることである。その経験がすべてあらかじめ現実の中にあることに思い至るだろう。しかし元になる経験は多くの場合それとして向き合われることもなく断片のまま日々流れ去ってゆく。その経験の質をつきつめるとともにそれを超えてゆこうとして言語的形象化が行われる。すなわち自己テキストは生の経験を超えていこうとするメタコグニションによってつくりあげられる。それは現実にあるそのものではないもの(非在)に作られる。そのためには日常の省略や凝集の変形、異化の作用などによって表象を作りあげる力が必要となる。これは自らによる日常の美的形成に近づく。

III イーザーの読書行為論——空白と意味

1 本を読む行為

編集者は本が読まれるということの中で何が起きているかをつかまなければならない。ドイツの文学研究者で受容美学の提唱者、ヴォルフガング・イーザーは『行為としての読書』(Iser, 1998/1976)の中で、テキストを読むなかで読者が意味とかかわるということとはどのような行為なのか、そのときに意味とテキストとはどのようなかわりを現すのかということを緻密に叙述している。

意味をテキストと読者の間に生起する“出来事”として分析するイーザーの読書行為論は、バフチンが取りだした(テキストの生の出来事)における意味交換に連鎖する。

イーザーの前提は、テキストから読者が受け取るべき意味は本を開いたときにそこにあらかじめ存在するわけではない、ということである。それは読者の意識の中に、読むという行為によって読者がかかわるなかで形成されるものである。そのかわりの成功によってはじめて、テキストが言表しているものと、読者が受け取りつつつくりだした意味が融合し、本という統一体が出現する、ということを示している。

このスケッチではイーザーの著作から次の三点を取

り出すことを目的とする。それはまず①テキストからの意味構成は読者によってどのようになされるのか。その意味構成の結果としての②“読まれたものとしての本”は、テキスト上に言表されていることとその裏にある言葉としては語られていないが意味されるようになることとの二層構造をどのようにして持つようになるか。そして③構成された意味は次に意味内容として読者の意識にどうはたらきかけ、読者の内においてどのようにふるまうことになるのか、その結果読者はどのように自己の意味や生活の改編を受けることになるのか、という点である。

2 テキストの空白と意味の形成

ここで意味の形成と言われていることについて立ち入ってみよう。テキストとかかわって意味は読者の意識の内にどのようにつくりあげられるのか。イーザーによれば、それは“形態的意味”といわれるイメージの形成を通じて読者の意識の内に存在し始める。それを、以下レパートリー、遠近法、否定性などに即してあきらかにする。

読者になじみのある日常の見方や習慣(レパートリーと呼ばれる)がテキストに引用されるとき、それを安定状態にしている背景がそのままそれを補強しているときには、それは日常の見方や習慣のたんなる反復になり読者の考えはおびやかされることはない。しかし、それが安定した文脈から切り離され、違った文脈に置かれて紹介されるときには、それに安住することがおびやかされる。なじみの思考には、新しい意味や解釈が求められていること、すなわち空白(イーザーは空白と空所を使い分けているが小論中では空白と表記する)がつくられたことが示される。このレパートリーが無効化されるとき作られる空白が意味構成への刺激を生みだし、読者は、レパートリー要素間の結びつきをつくりだすことによって等価系と言われる意味を担った総合体を生みだすことが求められる。

文学テキストには、さまざまな登場人物があらわれる。作者(虚構の)、語り手、主役、脇役、そして時に虚構の読者まで。筋も設定される。これらはそれぞれの遠近法を持って物語を開いてゆく。イーザーは、「文学テキストは…さまざまな遠近法の構成体」(Iser,

1998, p.60/1976) であると言う。遠近法とは、それぞれの立場の視点から見えるテーマや世界の風景、地平のことである。読者はテキストに示されるさまざまな遠近法を、読んでいるあいだ中渉り歩くことになる。意味は、それらの種々の遠近法が示すものをまとめ上げ、一望の視野のもとに統合できる地点に立たなければ読者のものになることはない。この遠近法を総合して得られる視界は、テキストにおいてはそれとして書かれてはいない空白箇所になっている。異質の遠近法に共通したものを指示する視点・地平が得られるときに、これらの遠近法が一体何を指示していたかをとらえることができる。それが一貫した形態的意味をつくりだす。その視点はテキストに言語的に示されているわけではなく、読者がイメージ化してそれをとらえなければならないものである。

さらに熟練の読者には、テキストには、書かれている表示体の背後に書かれていない意味があるらしい、ということが洞察されてくる。これはイーターが“否定性”として取り出した空白箇所である。

このように、テキスト中にさまざまに存在する空白とは、そこに書かれていない潜在的な主題が存在していることを示す場所であり、その主題を充たすべき意味を読者がつくりあげ、それをもって空白を充填することが要請されている場所である。そのような空白を豊富に持つテキストが読者の意味活動をうながしテキストの意味構成へと向かわせる。

イーターは、さらに深く形態的意味を分析する。「離ればなれになったままのセグメント〔要素〕の基底に隠されているが、〈見出〉されると直ちにセグメント全体を一つの新たな意味単位にまとめ上げるもの」(ibid., p.317)、このような“原意味素”と呼ばれるものが、レポートリーや遠近法という個々の要素に存在することを、イーターは想定する。それを発見して読者は、テキストを、一貫した形態的意味へと仕上げる。イーターは言う。「虚構テキスト〔小説などの文学テキストは虚構を通じて現実を媒介・伝達するとイーターはとらえる〕は、形態を介して読者の意識にその相関体を構成するらしい」(ibid., pp.215-216)。これは読者によるテキストの意味的再構成と言いうる行為である。

さらに彼は、形態的意味を形成する読書の心理過程

の深部には〈受動的綜合〉のはたらきがあることを明らかにする。この「受動的綜合の中核となるのはイメージである」(ibid., p.236)。意味はイメージとしてわれわれの意識に現れる。ここで言うイメージは、目の前の対象を知覚して描かれるような視覚的イメージではない。そのような感覚的対象であることを超えている。もちろん、概念化された抽象でもない。映画と原作の関係で説明すれば、原作を読んでから、映画を見ると、読者が持っていた主人公のイメージがたいいて裏切られる。これが、イメージと視覚的映像の違いから起こる落差の体験である。われわれが原作のイメージとしてとらえるということは、映画のように視覚的にはとらえていないということがこれでわかる。ある人物のイメージを描くということは、実は、意味の担い手としてその人物を構成しているのである。

このことは、たえずまとまりに向かうという意味活動の持つ志向からも説明されよう。意味活動は、要素を比較し、対比し、分類し、総合する活動であるが、そのなかで、等価の意味を呼び込み、呼び返し、吸収、吸着し、異質の意味を放散する磁場を持っている。まとまりをつくる、まとめる、まとめたがる、という意味活動の本質が底において存在する。

「個々のイメージはどれも、イメージの連鎖の中にあって、先行するイメージを背景に現れる」「すべてのイメージは、先に〈雪だるま効果〉と名づけた累積的な結びつき効果によって、読者の意識の中でまとまりをもつようになる」(ibid., pp.259-260)。

言語記号は、意味というそれとしては表示されていないものをまとめ上げるために、それに内包する指示を持って方向を与えるが、意味が受動的綜合として形を現すときにはそれは言葉が指示する以上のものであり、言葉の役割は終わる。すなわち意味に裏付けされた新しい言葉以上のものを表現するようになる。ここにおいて、意味を担うものとしてつくられたイメージは、言語記号の領域を超えてゆく。それが意味と言われる領域とそこにあるものを表現する。

ここまでのイーターの分析を敷衍すれば、“読まれた本”とは、言葉で書かれた言表とその裏打ちとしての意味の二層構造を持つようになるということが明らかになる。そして、本をその二層構造において十全に本たらしめるには、それに意味の形成をもって参加す

る読者の意識が不可欠であることを示している。読者の行為がテキストの基本的属性を形成するというこの考えは、イージーによって「内包された読者」と呼ばれる。次項ではもうひとつの重要な意味についてふれる。

3 意味内容と読者の生成

芸術的文化的な美は観照主体との関わりが不可欠である。書かれた作品テキストが「主体を必要とする」ということは、意味構成と読者主体自身の構成との両面」(ibid., p.266)にかかわっている。

読者が手にする意味については、イージーはふたつものを区別する。ひとつは前項で述べた意味構成である。もうひとつは意味内容と呼ばれるものである。これはテキストから構成された意味が意味内容としてテキスト外の読者の意識と生活のなかではたらくことである。「テキストと読者は相互に浸透し合う。…読者自身が意味構成を行うにつれて特定の構成をされるのである」(ibid., p.263)とイージーは言う。

レパトリーの否定は、テキストの中に空白をつくりだすだけでなく読者の立場にも空白をつくりだす。「読者は自分では当然と思っていた既存の世界に対して新たな関係に立たされる」(ibid., pp.371-372)。読者の既存の過去は否定されるが、それに取って代わるものは現在において空白箇所である。この「空所を補填するには、読者はテキストを真に自己の経験となしうる態度をとらざるをえない」(ibid., p.372)。これが第二の否定となる。「第二の否定では、読書中に作り出される意味形態を読者の慣習にフィードバックさせる力をもつ。その結果、テキストの意味を構成してゆくと読者の慣習的なものの見方との摩擦が生じ…読者自身のものの見方の変更すら必要となってくる」(ibid., p.379)。

それは経験と同じ構造を持っている。読書のあいだに自分の経験そのものが変化するということである。読書が終わったときに感じる「夢から醒めた感じ」(ibid., p.231)はそのことを示している。読書の現在にいるときは、そこで自分が形成するイメージは、われわれを現実の外に連れ出す力を持っている。そのイメージにとらわれ自分自身の現実から私を連れ出して

しまっているものに心を奪われている自分が居る。

こうして読みの世界にテキストの世界に、自己没入、自己投入、自己消去を行なうと、それによって見知らぬ自己を経験させ、そのことがかえって現自己との乖離に陥り、自己との分離、断層、架橋無しの状態に陥る。読者という役割と日常人である自分との落差感覚が生まれる。読者にはある緊張状態がつくりだされる。それは読者にあらためて自己統合への動機を生じさせる。自分まとめを刺激し、それへと向かわせる。テキストは“なにかを失くさせ、なにかを獲得させる”のである。

虚構テキストが行おうとしているのは、現実にはまだないもの、世界にまだ存在しない真に新しいものを、すでに言語化され(体制化され)ている世界を否定する触媒作用によって、もたらそうとすることである。読者がその求めに応じるためには、いまある現実の世界の外に出て新たな視点を獲得しなければならない。しかし、その未知のものは現実に存在しないゆえに現実世界の基準や評価によって測ることはできない。自己の現在世界を超え出なければそれに近づくことはできないだろう。その選択はまさになにかを捨てなにかを犠牲にしてなにかを選択するという自己の決断による確定となる。

こうして読者は「世界にまだないもの」「美的な性格をそなえた」意味を手にすることができる。これこそ「文学が虚構性をもって達成できる真の伝達機能」(ibid., p.396)であるというのが、イージーの最後の結論になる。

IV 新しい編集論に向けて

1 作品と読者との対話的応答

イージーの読書行為論が語っていることは、作品テキストが生産されることは本の“生の出来事”において前半分にすぎない、ということである。

本は、読みの初めにおいてその全体を一見して捉えることも一望することもできない。本を読むとは、意味の生成する時間を経験することを必要とし、その質

的時間の経過を、テキストとつき合わなければならない。読者が本を読むということは、読みのあいだ中において立ちのぼる意味を集積していく過程である。意味は、読みの中で転成し、あるいは雪だるまを大きくするようにふくらんでいく。こうして読まれた本はひとりの読者の意識に形成される意味によってそのつどテキストの新たな生を開く。この事情は編集者に本を生なまの出来事というスパンでとらえるとともに読者を生成中の出来事としてとらえる態度を要求する。

イーターは、読書という行為のなかでの作品テキストと読者とのかかわりの姿を取り出して示した。しかし、生なまの読者が作品テキストにかかわるといふ考えはナイーブに過ぎる。読者は他者との交換においてすでに作り上げた自己テキストを持って作品テキストとかかわる。そこで行われているのは本と読者の二者間の応答によって始まる作品テキストと自己テキストのあいだの意味交換である。読者は自己テキストを持って能動的に本とかかわる対話的読者として現れる。

本とかかわるなかで生まれるその対話的応答はテキストの場でどのように始まりどのように行なわれるのだろうか。それは多様な形で現れるだろうが、ここではバフチンとイーターにも依りながらその姿をまとめてみよう。

①対話は作品と読者の間に共有する主題が横たわっているならば、そのテーマがほんの少しでも共有され、重なるならば、その主題の肯定的共振により読者の側からも対応する意味が表出され始める。そのような生のテーマが重なる時、作品テキストが読者の生の代行的表現者として象徴的にはたらくと、「まるで自分の経験が書かれているように感じる」という共振を呼び起こす。作品は読者の自己テキストに組み込まれ、読者の生の経験は肯定され（自分の感じ方が巧く掬い取られ美的に形成されたと感じて）、それ自身強化される。これはイーターが見なかった読者とテキストとの〈肯定的な共振関係〉である。

②読者がテキストに向かい合ったときに対話的意味交換にかかわるのはイーターの言う空白である。テキストには意味を満たすことを待ち受けるさまざまな空白箇所がある。空白とはそこに充たされるべき意味が求められているが空白になっている箇所である。それを読者自身で埋めよという指示が置かれている。その

ような空白を豊かに持っているテキストが意味交換をうながす。

③イーターの言う否定的意味交換の場合は既述したように、読者が否定の洗礼を作品テキストを通じて受けることによってそれまでの慣習的な規範やそれまでの生を否定され、空白化されることによって起きる。その空白に自覚的に対峙せざるをえなくなった読者は、未知の世界に導かれ、新たなものを受け容れることになる。

④さらに核心的な空白は“否定性”として描かれるものである。表現とは（とりわけ文学的表現においては）、言葉で書かれている以上のもの、言葉の背後のもの、言葉ではもはや直接に表現し得ぬものを隠している。それは読者の心においてのみ引き起こされる。それは既知の言葉では表現に至らないものであり、未だ知られない意味であり、読みの世界への没入のなかでのみ向こうから言葉を越えた黙示としてやってくる。この空白との対話的意味交換によって生まれるものこそ読書の醍醐味であり、もっとも豊かなものである。

⑤対話的意味交換は否定（議論・論争）のかたちでのみ行われるわけではない。バフチンの言うようにむしろそれは特殊である。「対話的關係」は「他者の言葉への信頼、恭順（権威ある言葉）、見習うこと、奥に隠された意味を明るみに探り出すこと、賛同…意味に意味を、声に声を重ねあわせること、（同一化ではなく）融合による強化、多くの声の結合（声たちの回廊）による理解の補足、理解されるものの枠を超え出ること」（バフチン、1988、p.227/1979）である。そのようなときテキストにもう一つのストーリーが読み重ねられ倍音が響く関係を表す。

2 豊かな対話的応答を実現する本

本がこのような意味交換によってテキストの生を開き転生していくものであるなら、その経緯からは、二つの問いが生まれる。一つはその生の出来事を豊かに展開することのできる成熟した本とはどのような本か、それをどう評価するかという問いであり、もう一つは作品テキストと自己テキストの応答を豊かに生み出す対話性をそなえた本とはどのようなテキストとして作られるかという問いである。

(1) 成熟した本とは何か

最初の問いについて言えば、すでに前項においてひとつの答えを置いた。対話的意味交換をうながすそのような本は豊かな空白を持って読者を待ち受ける本であった。それを別の面から、「まとめの美学・哲学」(外山・美作)に向かう編集行為との関係から考えてみよう。

テキスト一般でなく書籍としての本はなにかしら全体性の成熟を持っている。〈まとまりあるもの〉とは、ある全体を持って立ち上がるものがあることを示す。本のまとまりとは、①著者が創造する内容的まとまりの側面と②それを基に編集によって現れる、本としてのまとまりあるものの側面がある。後者には、読む流れを作ること、それと関係する章節の構成や見出し作り、タイポグラフィの力などによって読みやすい本を作る編集の作業がかかわる。

内容的まとまりについて内田義彦は次のように指摘する。これは新書の執筆について言われたことだが、本は「雑誌の論文やエッセイとちがってピースミールの接近はゆるされず、一箇の世界を形成していなければならぬ」(内田, 1977, p.3)。一般読者に供される本の内容は個々の領域の専門家に供される論文群と違い「それだけで意味をもつものとして完結している」(内田, 1981, p.42)まとまりある「一つの世界」を持っている。それが一般読者に供される作品と言いうるものである。

なお“本の著者”という者は最初には居ない、それは“生まれる”ものである。とりわけ専門外の読者に向けて専門家が書く新書の著者は一冊の新書を書き終えてはじめて新書著者になると言われることがその事情を言い当てている。

まとまりある「一つの世界」を持つ本においては、本の全体に能く浸透する意味がはたらいっている。そのような成熟した本は、意味を開示し流出しうほどのまとまりを持ち、意味を湛えたものである。それが成熟の指標である。

読者はそのような本に対峙したとき著者の持つ、観、思想、美、意味、メッセージを聞き、その意味が開示する出来事の中を自身が生きたかのように体験しうることができる。あるいは空白を埋めようとする著者の

情熱との共有体験と言ってもよい。それは一義的な意味を学習するだけというモノログな関係ではなくテキストで行われた意味と美の構成過程をたゆたい、再体験できるようなものである。

原稿に内容的まとまりがあるかどうかを的確に評価できるかどうかは既述したように編集者の大切な能力である。それは経験的に言えば、大まかに次のような点を見ることでつかめるように思える。

まず、①対象をトータルにとらえ、テーマとするその世界の全体まわり、輪郭をこちらにもたらししてくれる大きさ・容器・容量を持つものであるかどうか(本としてテーマが小さすぎるものもありうる)。そして②読者を意味へとうながしその意味が読者をつかんで本の最後まで連れ去ることができる力と勢いを持っているかどうか。さらに③内容が文脈を持ちそれが構成として配置されていることが感じられるかどうか。

原稿がそのようなまとまりあるものの姿を示すとき、読者は作品のストーリーと対話しながらもうひとつの自己のストーリー(筋)を読み出し、その本にダブル・ストーリー、倍音を与えることができる。

原稿のまとまりを評価しうることは編集者として成熟した書籍を作りうる決定的なポイントであるが、本という出版物としてのまとまりを作る仕事はさらにそこから始まる。原稿を入手したときにそれは与えられていない。本というまとまりを立ち上げるこの仕事は専らプロとしての編集者の仕事である。本としての流れある構成作り、書名、イメージを立ち上げる組版、装幀、広告文・キャッチフレーズがそれにかかわる。

たとえば本は読む流れ(読みの文脈)を持たなければならぬ。それは原稿の構成的文脈とはまた区別される。それは読みをなめらかにし、読みに誘う「仕掛け」作りである。読者をもっとも核的な意味にうながし行きあたらせるために意味と空白のバランスよい配置を目配りする。それはなめらかな読みへの配慮であるとともに逆に意識的に流れの断絶や打ち切り、空白を置くことでもありうる。章節の構成、見出しづくり、改行なども生かしながら行われるこの作業は本の中に読み手の目を繰り込み、期待と共振を引き起こし、読み手に本の見晴らしをもたらしてくれる。

作品と言える原稿を入手することは編集者にとって幸運であるがなかなか稀なことである。編集者は構成

や作品のまとまりを仕上げることにもしばしばかわらねばならない。エッセイやインタビュー構成のような本だと著者は自分が書きたい語りたいことを順不同に書き示す。この場合全体的構成などはあらかじめ存在しない。編集者はテキスト全体を何回も何回も読み込む。読み込む内に著者の内部まで見えてくる。それがこういう文章を書かせているのだということがつかめる。それをふまえてテーマを配置して読む流れをつくる。編集者が日常行なっているそのような作業過程は“まとめの哲学”の過程である。

（２）応答性を豊かに含む本とは何か

二番目の問いに移ろう。本がテキストの生を開きうる条件をもうひとつの側面から考えるなら、それは本が読者との応答性を生みうるテキストに仕上げられているかという問題である。

本がそのような応答性を含むということは人文テキストであるならば少なくとも二つある。まずテキストに引用された先行テキストとの応答である。作品テキスト内に引用された他者テキストはバフチンが言うように引用という事自体が先行する書き手への応答となっている。これは、その先行するテキストが応答したであろう他者への応答へと連鎖する。この応答は読者の応答によってさらに未来へと運ばれる

もうひとつは、やがて現れるであろう読者の自己テキストとの応答への予期を含むことである。それは読者の自己テキストがかかえるテキスト外生への応答可能性をどれくらい豊かに繰り込んでいるか、ということにかかわる。その応答の広さと深さには著者の生実践の持つ広さと深さがかかわるだろう。

この点で編集者は何を行なうことができるか。編集者は著者と読者との対話に先立ち、いわばそのリハーサルのように原稿とのあいだで最初の対話を行なう者である。この対話における作品との意味交換とは、これまで述べてきたように互いの生を貪るような意味の接触であり、編集者もまたその生をかけた自己テキストを持って原稿を読み込んでいく。

その例として幻冬舎の見城徹の経験を聞いてみよう。見城は数々のベストセラーを文学者とともに生み出した編集者であり『編集者という病い』（見城、2007）のなかでその経緯を語っている。

村松友視の直木賞作品『時代屋の女房』の原稿には見城によって朱筆がびっしりと入れられている。そこには彼の筆で「赤く染めたカーリーヘアの女が一服するときに吸うタバコは、セブンスターじゃなくてハイライトじゃないでしょうか」とか「ウエイトレスの T シャツがまくれて見えたのが『臍』だけでは、彼女の人生が見えてこないの、『縦長の臍』としてください」とまで記入されている。その作業を原稿を入手するたびに毎日著者と行なっていく。見城はそれをデスマッチと呼び、「編集者はデスマッチができる気力がないとダメだね」「ハイライトかセブンスターか？どっちが正解なんてないですよ。その場の判断というのは、やっぱり自分の生きてきた過程、プロセスでしかなくて、自分の全人生をかけて、セブンスターではなくハイライトなんだと、指摘しなければいけない。独善的なものではあるけど、そこからしか火花は散らないし、作品も良くなつてはいかないんだよね」（見城、2007、p.275）。

この原稿との関わりで編集者に起動されているのは、それまでの全人生の重みを背負った彼の自己テキストの深みであろう。「僕が部下に言っているのはたった一つです。『おまえの人生の重さの中でものを言わない限りは、書き手に対して説得力がないし、書き手はおまえに何かをやってやろうとは思わないよ』と。だから、キッチリ自分の体重をかけろって…自分をさらけ出さなければ出てこない。編集者が葛藤をむき出しにしないで、書き手におまえさんだけ裸になれ、と言ったって土台無理な話で。これは、人間関係の基本だと僕は思ってる」（同、pp.227-228）。

見城の自己テキストは、ある独自の人間観を背負っている。「多くの場合、共振は、負の心情とか暗い心とかの人間の原質に触れたものから生まれるわけです」（同、p.231）。それをさらすこと、さらさせなければ人間を幅のある存在として描いたことにならないし平板なものに留まってしまふ。人間を理解したことにならない。「汚いものに目をそむけたら、極めて薄っぺらいものしか見えないんですよ」（同、p.62）。負を通じてしか描けないものとはなにか。人間の悲惨や暴力性という負が描かれればそうなるということではないだろう。否定面を描くことが自己目的でなく、そこまで描いてなお浮き上がるものがあるかどうか、そ

のようななかでも人間は生きようとしているんだよ、ということが描かれるか、ということだろう。編集者の持つ人間観が透徹した深さとして生きるような自己テキストであるならそれは広範な読者と共振する。『永遠の仔』で、作者はこうメッセージしているんです。『大丈夫、生きていいんだよ』って。生きてることを肯定しようとしてもできない主人公たちに向けて、生の肯定をね。…幻冬舎の手掛ける本を『人間の存在理由に気づかせる本』と言った人がいるけど、言ってくれているなど思っている」(同, pp.231-232)。それは言葉として描かれてはいないが読者が受け取りうるもの、イザーの言う“否定性”からもたらされるものである。その豊穡こそ本に豊かな対話的生産性を与える。

もちろん編集者が最初の読者であると言ってもこの事情は一筋縄ではない。編集者は自分自身という読者として現れるとともにその職業的履歴によって形成されたさまざまな読者を自分の内に持っている。文学読者、実用読書、テクニカルな読者、専門的読者、生活人読者。それらもまた編集者を介して意味交換に参加する読者となる。この意味で編集者の自己テキストは複層的であることを言っておきたい。

読者に手渡される前にそのような意味交換の洗礼を受けたテキストが成熟した書籍となる。その結果が本として現れるときそこにあるのは著者の作品であり編集者の姿は消えている。しかしそこにはすでに読者に開かれ読者の自己テキストを内包させることになった本が誕生する。

そこから始まるのは、テキストの豊かな^{せい}生の出来事の予感である。そこからさらに、テキストが予期しない自己意味を持った読者が現れ、テキストに書かれていない意味を受け取り、あるいは予想外の意味をテキストに付加し、“読まれた本 (read book)” をつくりあげる読書という行為が連鎖する。それはテキストの〈生の出来事〉の後半の開始である。

3 理想の本

ここにおいて、編集においてめざされるべき理想の本のモデルがあきらかになる。それは、本と読者との自由な対話、バフチンの言うポリフォニーを保障する

本、それを始発として読者の“自分まとめ”が自由に行われうる本である。

著者の示す作品世界と自由に交流・対話しながら、その中で自分であることが保障される本、本に没入することによって内からわき出る“流れや渦巻き”を肯定し著者のテキストとの自由な批評的対話を保証される本、作品に自分のストーリーを読み込むことを可能にする本、読む人を自由にし“自分まとめ”の自由を保障する本、それが理想の本である。

ここで行われる自由な“自分まとめ”は、読者に意味の開示を自由にうながし、自己によって意識されない未成の自分が引き出され、思いがけないところにまで連れて行かれるという体験さえありうる。読者はあらかじめそこに居るものではない。それは生成する。理想の本は対話的読者を生成させる力を持った本ということもできる。

そして付け加えるならば、読者をさまざまな強迫に迫いやったりかきたてたりする本でなく、またことさらに暴力性や人間の否定面を描いてみせることに安易に流れていく本でなく、それまでの生の現実のなかで〈自分であってはならない〉という否定メッセージを過剰に受け取ってきた現代の読者に〈自分であってもいいのだ〉ということに気づかせる本もまたそのような理想の本のひとつに加わるだろう。

4 編集者一意味と読者を待ち受ける者

ここまで述べてきたように編集の仕事は、テキスト(作者)とテキスト(読者)とが接触する境域に生まれる〈テキストの生の出来事〉を対象とする。

本の生の出来事に最初にかかわる環が編集者の自己テキストであることは既に述べた。編集者とはまず原稿の読み巧者である。プロとしての深い読みを持ってその接触が成功するならば読者をすでに「内包」した原稿の成熟がもたらされる。それはこれから現れるまだ見ぬ読者を待ちかまえる。読者がどのように生成するのか、どのような読者が生成するのかをあらかじめ予期することはたいへんむずかしい。「読者というものの」の出現を待ち受けながらあらかじめ読み切れることのない読者に対して働きかけねばならないという二律背反を抱えた仕事でもある。

しかし意味交換の連鎖を対象としてその鎖をつなぐこと、その一環を自分が握っていることを確信しながら行われる行為こそ編集という仕事のスパンを拡張し、希望となる。

そして編集の仕事とは空白に向き合うことである。空白を埋めて現れる意味や美やメッセージに向き合う力である。そのことは編集者に意味の感受者であることを求める。意味の空白の発見ということ言えば、企画立案自体が本として空白になっている箇所を発見することである。そして原稿を前にして、なによりもそこに意味が埋められていることをかき分け見出すこと、原稿がふくむ意味の水音を聴きあて、水流を発見し、その流れの方向を測り、それを流す水路を本のなかに設営する仕事である。意味を感知することに留まらず、意味の生成をなめらかにしたり、あえて障害を置いたりして読者を意味にいざなう目論見を仕掛ける。空白を埋めて現れるものを捉えたときにはその移ろいやすいものを損なわぬようそのままの鮮度でいかに読者に手渡せるかに腐心する。

このような編集者の行為はある専門性を持った編集者像を結ばせる。それは“テキストのソムリエ”あるいは“空白の技師”とでも言いうる姿である。編集者とは読者や空白というとらえがたい対象とふれあっていこうとする緊張と不安、迷いと動揺、そのつどの決断に耐えながら、そこに現れる真に新しいものを待ち受ける者なのかもしれない。

引用文献

- バフチン, M. M. (1984). 作者と主人公 (ミハイル・バフチン著作集 2) (斎藤俊雄・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社. (Бахтин, M. M. (1979). *Эстетика словесного творчества* Москва: Искусство.)
- バフチン, M. M. (1988). ことば 対話 テキスト (ミハイル・バフチン著作集 8) (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社. (Бахтин, M. M. (1979). *Эстетика словесного творчества* Москва: Искусство.)
- バフチン, M. M. (1995). ドストエフスキーの詩学 (望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫. (Бахтин, M. M. (1963). *Проблемы поэтики Достоевской*, Изд. Москва.)

- エーデルマン, G. M. (2006). 脳は空より広いのか——「私」という現象を考える. (冬樹純子, 訳・豊嶋良一, 監修). 東京: 草思社. (Edelman, G. M. (2004). *Wider than the sky*. New Haven: Yale University Press.)
- ホルクウィスト, M. (1994). *ダイアローグの思想——ミハイル・バフチンの可能性* (伊藤誓, 訳). 東京: 法政大学出版局. (Holquist, M. (1990). *Dialogism*. London: Routledge.)
- イーザー, W. (1998). 行為としての読書——美的作用の理論 (響田収, 訳). 東京: 岩波書店. (Iser, W. (1976). *Der Akt Des Lesens*. Munchen: Wilhelm Fink Verlag.)
- 見城徹. (2007). 編集者という病い. 東京: 太田出版.
- 美作太郎. (1974). 編集論序説. 出版研究, 5, 47-75.
- 美作太郎. (1988). 編集と著作権. 東京: 日本エディタースクール出版部.
- 茂木健一郎. (2001). 心を生みだす脳のシステム——「私」というミステリー. 東京: 日本放送出版協会.
- 森有正. (1970). 生きることと考えること. 東京: 講談社 (講談社現代新書).
- 外山滋比古. (1975). エディタースhip. 東京: みすず書房.
- 内田義彦. (1977). 苦勞ばなし. 図書, 333, 2-6.
- 内田義彦. (1981). 作品としての社会科学. 東京: 岩波書店.

(2007.3.30 受稿, 2007.10.23 受理)